

復興の歩み 追った7年



「防災意識を見直すきっかけにしたい」と話す
三浦寛行さん＝岐阜市神田町、岐阜信用金庫本店

カメラマン三浦さん、岐阜市で写真展

東日本大震災の被災地の写真を撮り続けている岐阜市鷺山のカメラマン三浦寛行さん(49)の写真展は19日から、同市神田町の岐阜信用金庫本店ロビーで開かれる。震災から間

もなく7年。三浦さんは「防災意識を見直し、災害時にどう命を守るかを改めて考える機会にしたい」と来場を呼び掛けている。3月20日まで。
(舌間隆博)

東日本大震災 被災地を定点撮影

三浦さんは3カ月に1度ほど被災地を訪問して撮影を続けているほか、被災地と東海地域の子どもたちの交流を支援し続けている。写真展は年2回開いており、今回はパネル8枚に6点ずつ、時系列で被災地の写真を並べた。

「あれから7年経過して」と題した新しいパネルには、2019年にラグビーのワールドカップ(W杯)が開催される岩手県釜石市のスタジアム工事の状況や、同じ地点の撮影を続けている同県大槌町で家などが続々と建ち始めている様子などを収めた写真があり、目に見えて復興が進んでいることが分かる。

一方で、防潮堤の整備が進んでいない宮城県石巻市門脇地区は荒涼とした風景。三浦さんは「復興のスピードは、地域差も個人差もある。W杯が開かれる2019年までは撮影を続けたい」と話していた。